
幽靈？拳で叩き伏せろッ！！！

夢餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽靈？拳で叩き伏せろッ！！！

【Zコード】

Z9528Y

【作者名】

夢餓鬼

【あらすじ】

「死ネやコラア――――――――――――――――――――（怒）」

ひょんな事から幽靈が見えるようになった小太郎。…そんな彼の趣味は『幽靈イジメ』！！転校してきた少年が、小太郎を激闘の世界に引きずり込む……はたして、小太郎は無事でいられるのか？

シャーマンキングの二次小説を見てみて、余所以上に少なかつたことに絶望しました！！私の作品を見て、もっとシャーマンキングの一次小説を増やせるよう、頑張って面白い物を書いていきたいです！

第一話 開拓へ醒る（～）少年（前書き）

はじめまして…

この作品は作者の気まぐれなため、更新は不定期です。

第一話 幽靈と睡る（へ）少年

彷徨える死者の魂

大地の森に息づく精霊 そして神仏

それらと自由に交流し、人間ではなしえぬ力をこの世に行使する者たちがいる

彼らは『シヤーマン』と呼ばれた

「… フアアア～～～アツ… あ～～かつたるい…」（眠）

埼玉県×××市ふんばりが丘…私立森羅学園に続く朝の通学路を一人の少年が歩いていた。

…欠伸を搔きながら眠そうに歩いて来る少年、……彼の名は『江崎えさき小太郎』と言つ。森羅学園中等部、1年C組の13歳の中学生だ。

…外見は黒目黒髪と日本男児の色をしている。眉は細長く、眼は他人と比べると少し睨んでおりいつも不機嫌な顔をしている印象が特徴的な顔だ。

服装は夏用の制服を着ているが…シャツのボタンは全部はずし、中に入っている黒色のタンクトップが見えている状態になつており、全体的に見るとガラが悪い感じが滲み出ている…

身長160cmと中学生にしては少し高めの方であり、それが返つて周りを威圧するように感じられる。

…傍から見れば普通の中学生に見える彼にも、誰にも言えない秘密がある。

それは、俗に『幽霊』と呼ばれるモノを、彼は見る事が出来るのだ。…彼が幽霊を見れるように目覚めたのは小学5年生の前期頃で、切欠は『両親の死』出会つた。

その日、学校から帰つてきた小太郎は家で自分の両親が返つてくるのを待つていた。…しばらくすると電話がかかってきて、小太郎が受話器を取ると両親が死んだ事を知つてしまつ。…死因は『交通事故』。

在り来たり過ぎるかも知れないが、それを知つた小太郎はひどく悲しみ、大声を出しながら一晩中泣きじやくつっていた。

以来、親戚中をたらい回しにされ……中学に入る時、小太郎は一人暮らしをする事に決めた。

家賃は親から受け継いだ遺産を使い、高校になつたらバイトでもして稼いでいこうと考えている。

そして、そんな彼の趣味はというと

『……ヒイイイイイイ！？お助けええええええええ！』

…交差点で小学生の女の子を荒い息で見ていた小太りの男の幽霊。それを見つけた小太郎はその幽霊のそばまで歩いていくと…突然、罵声を飛ばしながら右足で幽霊を踏みつけ始めたのだ。

：小太郎の攻撃は幽霊にも通つてゐるようであり、踏みつけん」と
こ小太りの幽霊は奇声を上げて許しを二つ。

『ちょっと！？本当にやめてください！拙者が一体、何をしたと言つてゴザルカ～～！？』

— ८ —

……もうおわかりだろうが、彼の趣味は『幽霊いじめ』である……

流稀は幽霊が見えるようになつた頃、見たくないのに見えてしまつた。彼らを心底怖がつた。しかし6年生後半、さすがにストレスが溜まつたのか幽霊に下剋上開始。流稀は視界に幽霊が入ると、片つ端つから幽霊をシバキ倒しまくつた。

以来…流稀は幽霊全般が嫌いになり、今ではサンドバックよろしくヒドイ目にあわせていた。

「…チツ！今日はこの辺で勘弁してやるよ…」

《……ブヒイ～……》

小太郎は一通り幽霊をシバキ倒すと、自分の近くにいた中学生達がこちらを向いているのが眼に入る。

…普通、幽霊は一般人にしか見えない。傍から見れば小太郎は、一人で大声を上げながらジダンダしているように見えるだろう。周りの学生たちがヒソヒソと影口をたたく。…しかし、

「…あー？…失せろや…ツコツ…！…！」

生徒達を見ながら低い声で言う小太郎。すると言われた生徒達は影口を止め、一斉に前を向いて歩き始めた。

…ちなみに、流稀は人間も嫌いである。

小太郎は顔のせいか、学校の先輩たちにも呼び出しなどくらい…流稀は逆にボコボコにして叩きのめす。

おかげで中等部では喧嘩最強とまで言われ、結構恐れられる存在となっている。

…小太郎の近くに人がいなくなると、またダルそうに学校に向かう。（…今日も机で眠ろッと…）

そんな事を欠伸をしながら考え、自分の教室まで歩き出す。

…しかし、小太郎は知る由もない。

…今日、転向して来る少年が自分の運命を変える事を、自分がとん

でもない戦いに巻き込まれてこくなぞ、夢にも思つてはいなこだろ
う。

第一話 開拓の壁（へ）少年（後書き）

あつがとひやこめした

第一話　主人公登場（前書き）

感想や評価をもとむ！

第一話 主人公登場

朝の出来事の後…小太郎はいつものように教室に入ると、直ぐに自分の机に座りそのまま突つ伏して眠る体制を取る。

どうやら彼は、このままお昼ごろまで眠りに入るようだ。…明らかに眠りすぎである。

…しかし小太郎が眠りに着いつとした瞬間、大声で話し合ひ話が聞こえる。

「だから本当に見たんだってば…！あの墓地で！幽霊が！星見ながらワイヤワイヤってたんだよ！」

(…何だあ、うるせ なあ？…ぶつ殺すぞ………?)
いきなりの騒ぎ声で不機嫌になる小太郎。…顔を上げて声の発信源を睨みつけて見ると、何やら興奮した様子で二等身（小っさー）の同級生が騒いでいた。

「そりやぼくだつてこの目で疑つたさ…」

「俺はお前の頭を疑うぜ

まん太よ

「うほつ…?」

二等身の子（確かに太つて名前だつかけか？）の言葉に同級生が呆れて喋りかけている。…まあ、このご時世でそんな事言つてりや普通に頭がおかしいと思つしな…

「幽霊なんてんなもんいるわけねーだろ」

「どうせ何かの見間違いでしょ」

「お前 勉強のしそぎで頭 疲れちゃつてんじやねーの？」

「いや つづーかこいつは靈に憑かれてるんだろ？」

「つまいつ！」

幽靈を掛けた洒落に爆笑する同級生達。

……いや、正直そんなに面白くないぞ！？ むしろサブイボ立ったわ
！！

同級生達の言葉でキレるまん太、そこに教師が教室に入つてくる。

「つむせえぞ何さわいでんだ小山田！ H・R ホームルーム 始めつから席に戻れコラ」

「あッ！ 先生だ」

教師が来た事で小山田が席に戻り、教室が静かになつ……てねーよ
！！ メツチャ騒いでるぞー！ ？

先生來たつてのに生徒達自由氣ままに騒ぎまくつてんだけどー！ ?
やんと席に着かせろよー！ ！

「……あー……つうわけで今日からテメヒらに突然の知らせがあるんだ
がー」

無視！？ この状況で無視！？ 何でコイシラほつとこてんの！？ 明
らかに話来てねーぞ、こいつ等！ ？

……もう、背景の効果音にワイワイ、ガヤガヤ、ギャッハッハッとか
明らかに漂つてんだろーが！ ？

なんだ！？ もうこの教師諦めてんのか！？ もう止める氣もないつ
てか！？ 教師やめちまえよー！ ！

「転校生の朝倉 葉君だ」

教師がそう言つと、廊下から見ながらに『ユルそうな 雰囲氣を出

していいる少年が入ってきた。

「…というか、このタイミングで転校生の紹介…？生徒達もいつの間にか全員席に着いてるし…！？」

「…あー彼は家の事情で単身 出雲からやつて來たそ�だ。つつうわけでテメエらもいろいろ面倒見てやつてほしこ…んん！？なんだ小山田！？変な力オして」

教師がビックリしながら人間の限界をはるかに超えるほど口を開けていいるまん太に質問する。

「…！」

その状態で何かを言おうとするまん太、…てか、顎外れてんじゃねーか？

「…！」

(ピキッ…)

そして突然、大声で叫びながら転校生に指を指す。周りの同級生もビックリし、伏せていた小太郎の額から青筋が浮き出る。

「みんなツー！こいつだよこいつが例の幽霊男さー！」

「ゆ…」「ゆうれいおとこ…！？」

(……)

まん太の言葉に教室がざわついていく。…それを見ていた葉は少し何か考え…、

「幽霊なんているわけないだろ つていうかお前 誰？」

「何いい

「…？」

まさかの知らない人発言…！転校生の言葉で周りは爆笑し、まん太は机を叩きながら絶叫する。

すると絶叫していたまん太の後頭部に剛速球の上靴がブチ当たった
!!

「いつた　！！？」

突然の痛みにビックリしながら上靴の投げられた方向を涙目で見る。

「…うるせ…………。次喋つたら、ぶつ殺すぞ…………！」

滅茶苦茶不機嫌にまん太を睨みながら低い声で呴く小太郎。

そのやり取りを見ていた生徒達は一斉に口をふさぐ。

葉もその光景を見ていたが、小太郎の方を少しだけ見つめるだけ
であとはユルそうにしていた。

しかしそんなやり取りなど知つたこつちやないとばかりに、小太郎
は静かになつた教室の中で机に突つ伏して惰眠を貪り始めたのだつ
た。

次に小太郎が眼を覚ました時はすでに放課後になつており、教室に
は誰ひとり残つてはいなかつた。

…どうやら、彼は一日中眠つていたらしい…勉強しろよ。

小太郎は欠伸を一つして立ち上がると、かばんを持って学校から帰
宅することにした。

帰宅途中、小川が流れている橋を歩こうとすると小太郎は意外な人
物に出会つた。

今日転校してきた少年が橋の手すりに腕を置き、何やら空を眺めながらボーとしていたのだ。

…そんな葉を眺めていると、今日自分のクラスに転校してきた葉という人物だと小太郎は思い出す。

一体こんな所でなにしてるんだと葉を見て観察していると、突然葉は息を吐き出し…

「あ…………自然と一緒になるつて、気持ちいーなーつ！」

そんな事を言いながら笑顔で言つ葉。…は？一体何言つてんだコイツ？…サイ「野郎か？」

「なんじゃそりやあ…！」

「んあ？」「おお！？」

：小太郎が胡散臭そうな目で葉を見ていると、突然電柱の陰から小山田まん太がツツコミを入れてきた。いきなり怒鳴ってきたので小太郎も驚いた声を上げてしまう。

「ああッ！　しまった！つい突っ込みが…！　て、なんで江崎までここに！？」

「あれ？…お前たしか教室で寝てたやつ」

「…俺がいちやあなんか不満でもあるのか…てめえ…ツ」

小山田のツツコミに小太郎の存在を知る葉と少し低めに呟く小太郎。

…取り合えず三人一緒に土手に並んで座り話をする事に。

小山田の話によると…今日の教室の一件で納得しきれないまん太。絶対正体をあばいてやる…！！！つと一人意気込み…放課後、葉を隠れながら尾行することに。

そしてこの橋に立ち寄つた葉を見はる事約三時間…！！…さすがに苛

々しながら見つめていると、突然葉のキチガイ発言勃発！さすがに我慢できなくなりつい大声でツツ「んでしまい現在に到る。と…、

…なんて言いますか、ハツキリ言ひて時間の無駄以外の何者でもない！！

三時間もこんな所でボーッとしている「トイシもそうだが…それをズーッと見ていたまん太も相当である。

そんな会話を聞いていた小太郎は、心底呆れた様子で一人を見下していた。

「ははは そうか それでオイラの後をつけてきたのか。
そりや悪いことをしたなー」

「……！？」

そんな明らかにストーカー発言にも葉は笑いながら喋っている。その様子にまん太も疑問になってしまふ。…ちなみに、小太郎にそんな真似をした場合は問答無用で叩き潰されるだろ？…。

「え…！？怒つてないのかい！？」

「なんで？お前オイラが学校で知らんぷりしたからついて来たんだろ？」

「…んなつ！？じゃつ じゃやつぱり！」

普通に幽霊が見える事をカミングアウトする葉…拍子抜けしそぎて逆に驚いた小山田と小太郎。

「いやあ…オイラ面倒くさがりだからさあ 学校で秘密がばれて騒ぎになるわけにはいかんかったのよ」

「…ひ 秘密…！？」

「ああ オイラ 実は修行のためにやって來た „シャーマン“ な

んだ」

…いきなり自分の秘密を喋り出す葉の言葉にこの場が静かになる…。

「シャ… シャーマン…！？（シャーマンって何だ！？ つてい
うかこいつ…！？それは秘密なんじゃなかつたのか

ツ…？ 何故あつさり言つ！？）」

（…今日のメシ何にすつかなー？）

「！？」

…葉がいきなり秘密を暴露したため小山田は…？マークを浮かべ混
乱し、それを不思議がりながら笑つて見ている葉。…小太郎はもう
すでに話を聞いておらず、今日の晩御飯の献立を考えていた。

「うえつへつへつ シャーマンはあの世とこの世を結ぶ者 困つた
事があつたら いつでも呼んでくれよ力になるぞ」

そう言いながら立ち上ると、葉は夕日の沈む方に歩いて帰つて行
つた。

…そして、この場に残つてしまつた二人はその後姿を眺めて見てい
た。

「…なんなんだ、アイツ…ツ…？」

「…よしつ！ 今日は鮭の焼き魚にしよう」

…まん太の疑問に夕飯の献立を言う小太郎。

…ちなみに、小太郎の夕飯はコンビニ弁当になつていた。

第三話 憲依合体での戦闘（～）（前編）

シャーマンキングの小説、もっと増えればいいのに…。

感想などお待ちしております。

第三話 憑依合体での戦闘(?)

葉の力ミングアウトから一日経ち……小太郎は自宅で寝苦しご夜を過ごしていた。

あれから家に帰つて学校に行き、そのまま放課後まで眠つてゐるために今日はなかなか眠れない。

……といふか、ここは学校に向ひて行つてゐるの?

寝むれない小太郎は「やつと言えば……」と学校で寝る前の出来事を思い出す……。

……今日も机で眠らうとする小太郎。だが、昨日に引き続き教室が騒がしい。

イラつきながら音のする方に眼を向けて見ると、昨日転校生と一緒にいた小山田が痛々しく身体に包帯を巻き付けた姿が目に入った。

なんでも、夜中に近くにある墓場に一人で忍びこみ、墓場に屯つていた不良どもにボコボコにされたらしい……。

それを聞いた小太郎はまん太を見て、

(…フツ、間抜けな奴…)

つと、結構ヒドイ事を考えながら眠そうな目で眺めていた。

…その後、同級生達に笑われていたまん太に転校生が介入してきたらしいが…残念ながらその後、小太郎は惰眠を貪り始めたので良くはわかつていない。

つーか、他人の事などハツキリ言つてどうでもいい小太郎は気にするそぶりも見せなかつた。

…そんな事を思い出しながら眠ろつとする小太郎だが…部屋が暑苦しそぎて全く眠れない。

「ツ～～ガアアアアア…！　暑ツツつ苦しいんだよ…！　死ねよ、
温暖化ツ…！」

小太郎は理非人過ぎる事をどなり声を上げながら部屋を出ていく…どうやら散歩に出かけるようだ。

勢いで外に飛び出し、取り合えずブラブラと夜の街を充てもなく歩き回る。

…小太郎が墓場の前を通りうつすると、突然墓の方から叫び声が響いた。

「なんだ…？こんな時間だから幽靈どもが騒いでんのか…………ち
ょうどいい！」

…俺のストレス発散に『協力してもらおうか…？（笑）』
快楽殺人鬼発言全開の事を言う小太郎は墓場の方に顔を向けると、
ニヤッと効果音が付きそうな暴力的な笑みを浮かべてそのまま墓場
の中に勢いよく突入した！

…「イツ、絶対に主人公向いてねえ！！

墓場に近づいていくにつれ、声がせきよりも鮮明に聞こえて来る。
…アレッ？つていうかこの声…

「つて もう田の前だし！…かえって助からないから！帰して！
「あア…！？テメエ…今オレらになんつた…？こつから出でい
け…！？」

…ブツ！殺されてあの世に行きてエのか『ラア』

小太郎が声のする方に顔を向けると…そこには葉とまん太、それと
明らかに不良ですよと自己アピール満々の男たちが睨みあつていた
…どうやら喧嘩でもおっぱじめるらしい。

そんな緊迫した空気に当たられてか、小太郎がニコニコと笑いなが
ら葉達のいる方に歩み寄っていく。

「よ～一人さん！こんな夜中に何してんだ？…随分面白そ～な事にな
なってるじゃないの（笑）」

「あれつなんだ、おまえ小太郎じゃないか？」

「…? 何でまたキミがここにいるの…? …それよりもここから助けてツ…!」

突然、小太郎が登場したことにより一人は驚く。

「ああん!? また人が増えたぞ、『ハハア…!』

「どうします、竜さんツ…?」

向こうにも小太郎が現れた事に少しだけ騒ぎ出す。… どうやら、あの『竜さん』と言われたりーゼントが頭の様だな…。

「ツ構わねエ、アイツも一緒にあの世に送つてやるだけだ!」

『さすがは竜さんツ…!…!』

どうやら小太郎も一緒に叩き潰すらしい… ていうか、夜中なのにつるせ よコイツ等。

「つていうか… その あの世の連中があんたらをメーワクだと見てるんです」

腕を腰に当てながら言い放つ葉… その言葉を聞いた不良共は爆笑する。

…だからいつもえつて言つてんだろうがツ…!

「ブツ!」

「ぶわ つはつはつ! また靈だとよ…!」

「バー力! 竜さんは靈なんかちつとも怖くねーんだぞ!」

小太郎も怖がんないんですが… それどころか幽霊シバキ上げるんですけど。… 明らかに靈よりも恐ろしい存在だからね!

「オウ よー やれるもんなら…」

「やればいいんだろ?」

『…?』

「さつきからもう戦いたくてウズウズしてるんだ だよな

だまる

『阿弥

陀丸』！』

葉がそう言い…その後ろから長髪の侍…『阿弥陀丸』が姿を現わした…突然の事にまん太と小太郎もビックリする。

「サツサムライの靈…！？」

「…ビックリしたア…驚かすなやコラア…！…（怒）」

『この度は拙者の屈辱をはらす機会を『えて頂き感謝するで』ござる！葉殿！！！』

小太郎達の言葉を無視し、相手の方を見て睨む阿弥陀丸。…その言動がさらに小太郎をイラつかせる！

「屈辱…？ 屈辱つてもしかしてこの幽靈…！」

「おいコラッ！無視してんじゃねーぞ…？（怒）…たかが靈」ときが俺の話をツ…」

「あの…！…こわされた首塚の主…！…『阿弥陀丸』…！」伝説の侍…！…（たつ…！…たしかに本物のサムライなら木刀なんかメジやないはず…！…でも…！…）」

叫ぶ小太郎の言葉を遮り、言葉を放つまん太。それに気付かぬまま恐る恐る竜達の方を見る。

「…オイオイオイ…いいかげんにしろよオイ… まだ阿弥陀丸とかいうクソの話か？」

（ホラやつぱり奴らにその姿は見えてないし… もちろん触れる事だつて出来ないだろう！ しょせん靈だもの…！…）

葉達の言葉に顔の血管を浮かせながら言つ竜、それを見たまん太も身体から冷や汗を流す。

（一体どいつするつもりなん…）

「オイ…スペースショット（あだ名）…アパッチ（あだ名）」

竜が名前を呼ぶと筋肉ムキムキの男が一人現れる…なんか、この

言い方気持ちが悪い。

「！」

「奴らを…ブツ殺せエエー…！」

リーゼントが叫ぶと、男たちが一いつ斉に向かつて勢いよく突進してきた…！

「だああああつ…！…きさき来たよ…！…どうすんだよ…！…せつかくのサムライも靈じや意味ないじやないかーツ…！」

「テメエー等…！…だから人の話を最後まで聞きやつ…！」

「ハツハツハツうるせえな

不良がこっちに向かつてくるとまん太が葉に泣きながら縋り付き、葉はなぜか笑いながらこの状況を見ている。

「それじゃ いつちよ見せつけでやうつか阿弥陀丸」

『ウム』

「お前の剣技けわざとオイラの能力のうりょくがあわされば 無敵になれるってことを…！」

葉がそう言い右手を出すと…阿弥陀丸がヒトダマになり、葉の掌に収納される。

「ヒツ…ヒトダマになつたつ…？」

「言つただろう あの世この世との世この世を結ぶ者 それがシャーマン だつてな…！」

カツ「よく説明する葉、その間にも不良たちはこっちに近づいて来る…」

「サーモン？」

「食いてエのか！ ロラア…？」

声に出ていたのを聞いていたのか、間違つた言葉を聞き返す不良た

ち。 …おまえらもつ喋るな。

「 「死ねえ ッ」「

「行くぞ！」

葉はヒノタマを持った右手を身体の横に持つて行き、そのまま身体に押しつけるようにヒノタマをねじ入れようとした。 …が、その時！

「憑依合ツた「うるせえーッ！！！人が喋つてるときに、口出しながらしてんじゃねーぞ、コラア ……！」（激怒）

…え？」

葉が阿弥陀丸を入れようとした瞬間…話を邪魔されて苛々していた小太郎が怒りの雄叫びを上げ、こっちに向かってくる不良一人を殴りつける。

ドゴンツ…!!

「 「「」ふおおおおおおおツ…？」」

…決して人体を拳で殴つただけではしない鈍い音を響かせながら、不良たち二人は空中に吹つ飛ばされた。

『……ツえ？』

その光景を見ていた全員（阿弥陀丸含め）が空中にブツ飛ばされた不良たちを見る…。

そして吹き飛ばされた二人が地面に音を立てて落ちると、残った不良たちが叫び出す。

『ええええええツ…？？』

「パツ！パンチ一発で…！？」

「あの一人がやられた！？」

「ていうか何だよあの音！？人間の出せる音じゃねえ……」

「どうなつてんだこりやあつ！！！」

そりやあ自分達より明らかに年下の奴にやられれば目を疑うだろ？

…運がないわ～「コイツ等。

「あ ッムシャクシャするう……この靈共を叩き潰してストレス発散しようと思つたが…止めだッ…テメー等で俺のストレスを発散させてやる！！！（ギロリツ…）」

小太郎はそう言つと不良たちの方に顔を向け、…まるで『閻魔』の如き形相で竜達を睨みつける。

睨まれた不良達は悲鳴を上げ明らかに腰が下がり、傍にいた葉達も顔が青くなる。

「なつ…！（なんだコイツッ…！？地味だと思つていたら滅茶苦茶喧嘩強えーじやねえか…！…てゆーかなんだよあのパンチ力…！ありや堅気なんてもんじやねーぞ…！）」

明らかに身体を小刻みに揺らし、眼を見開きながら小太郎を見る竜。

…明らかにランクが違うッ…！…

「…あーゾー…！思ひ出した…！…竜さん！そいつ『森羅の撲殺王』つスよ…！」

…小太郎を見て思い出した不良…ボールボーイ（あだ名）は怯えながら小太郎を指差し叫ぶ。

『江崎 小太郎』…彼は学校で自分に喧嘩を売つた者を残らず買い、片つ端つから叩き潰してきた。

そしてその事が噂になり、名を上げるために周辺の不良たちが小太郎に喧嘩を吹つ掛けて来たのだ。…だが、それでも小太郎は喧嘩を買い…その圧倒的すぎる暴力で全てを叩き潰す…！

それが切欠でさらにエスカレート。 同い年の中学生だけではなく、高校生、暴走族、警察、外人部隊：拳句の果てにヤの付く人たちまで狙われるようになつた。だが…小太郎はそれをモノともせずに戦い続け、こつちに移ってきて半年間の間かすり傷一つ負う事もなく屍の上に立ち続けたのだ…。

…彼は戦つ時、何故かいつも恐ろしい笑みを浮かべて喧嘩をすると
言つ。

笑みを浮かべたまま相手を叩き潰す姿はいつしか、全ての者が小太郎を見ると恐怖と尊敬の念でこゝつ呼んだ。『森羅の撲殺王』と。

「こいつが…その『森羅の撲殺王』だと…！…？」
ボールボーイの言葉に驚愕する木刀の竜…。明らかに身体の震えが激しくなる。

「…チツ！チクショウ！なめんじやねえぞ！」「ラア！」
自暴自棄になつた竜は木刀を振りかぶると、そのまま小太郎に突進していく…明らかにやられ役だつ！！

振りかぶった木刀が小太郎に当たりそうになつた瞬間！

小太郎の怒りの籠つた右アッパーが竜に向かつて放たれる！――

ノン・ノン・ノン・ノン・ノン

ンツ！・！・！

「グツバアアアアアアアアアアアアアアツ！！！？」

振り下ろした木刀は小太郎の拳により砕け散り、そのままの勢いで竜の顎に突き刺さった。

：その攻撃を受けた竜は空中を飛び、仰向けになつて地面に叩きつけられながら落ちて来た。

「ああっ」 「竜さんが負けた

残っていた不良たちがそこへと
竜を連れて全力で逃げていく。

「ふう〜〜〜ッ！…ま！少しはすつきりしたかなあ…！」

あとには笑顔でそう言う小太郎と…それをボカーンと見ていた葉達
だけが、この墓場に存在していなかつた…。

27

一九三

僕と葉くん、小太郎くんとの魂の世界を巡る冒険が始まったのです。

まん太

第三話 憑依合体での戦闘（～）（後編）

小太郎「…やっぱ此処の靈共でストレス発散するか…」
残つた全員「『止めらッ（ド）』『やる（ド）』…』」「

突發的なネタ

「泣く子も黙る『木刀の竜也』とは俺の事よ！」
「硫酸？」「化学薬品か…」「ハア…？」

第四話 鬼人…ゲットだぜッー！（ポ○モン風）（前書き）

評価お願いします

第四話 鬼人…ゲットだぜッ！！（ポ○モン風）

『木刀の竜』を小太郎のアッパーで地面に沈めてから数日が経ち、

小太郎達三人はまた、昼間に墓地に訪れていた。

「んん…！白い雲 青い空 緑の匂い やっぱ自然は気持ちいいわ！」

そんなユルユルな事を言いながら葉は崖に生えている木に寄りかかりながら座ると、とても気持ちよさそうに昼間の時間を満喫していた。

「…」これが自然だつて…？」

その葉の傍で体育座りをしながら辺りを見渡すまん太…そして、次の瞬間立ち上がり、

「どう見てもこれは！ 不自然な光景だろ つ！！」

目の前の崖の下にある墓場から、靈たちで溢れ返っている光景を見ながらまん太は泣きながら絶叫する。

「いいかげん慣れろよまん太 だから常に靈と共にある者 それがシャーマンなんだぞ」

いちいち騒ぐまん太に葉は腕を後ろに回しながら言つ。…いや、それでも普通にこの光景は無理だろ。

「ほれ、あそこにいるコーラみたいに慣れればけつこう楽しいぞ」そう言いながら葉は墓場にいる小太郎に指差す。それにつられてまん太が指を差した方向に目を向けると

「オラ、ウザッてーーんだよ死んどもガッ！…さつさと昇天して塵になれッ！…！」

：小太郎はいつもの「」とく靈達を足で踏みつけながら罵声を浴びせまくっていた。

「ちょっとおー!?何やつてんのコータ君…？ やめなよつ…！」

小太郎の行動にツッコミながら止めさせるまん太。：その言葉を聞いた小太郎は渋々やめると、そのまま葉達のいる崖の上まで戻つて行つた。

ちなみに「コータ」と言つのは小太郎のあだ名であり、あの夜の事件以来、「コータ」と葉達は学校でもつむよつになるまで仲良くなつていた。

：最初、小太郎に対してまん太は怖がついていたものの、基本的に話せば喋り合つたり出来るので、葉が間に入るなどし仲良くなるのも時間の問題だつた。

：まあ、小太郎の喋り方は汚いが。

「常に靈と友のあるもの でもその君がなんで東京に修行なんか ！？」

「まあ修行つつうよりは仲間集めだな」

「仲間集めー？」

葉ののんびりした答えに大げさに叫ぶまん太。

「ああシャーマンの“格”はそのほとんどが自分に協力してくれる靈の“強さ”によつてきまるんよ。

それは何も力に限つたことじやない 知能・技術・あらゆるものに優れた靈を味方につければ付けるほど いろんな時に役立つし一人

前のシャーマンとして認められる」とになる

「じゃ君は一人前のシャーマンになるために一人で上京を…
まん太が聞くと…葉は木から離れ崖に立つと、腕を組みながら町を見渡す。

「おつ だが集めがいはあるぞ…なんつても東京にはわん太といふからな
いろんな思いをこの世に残していくまことに成仏しきれないでいる 強者
の靈達が…！」
真剣な表情でそう語る葉、その光景を見ていたまん太は尊敬の目で葉を見る。

(な…なんかスゴイな…ボンヤリしているよつて 葉くんつて実は…)

「というわけで 仲間になつてくれよ阿弥陀丸」

「いきなりかーっ！」

葉のいきなりの勧誘発言に目を飛び出しながら驚くまん太。 阿弥陀丸も突然でビックリしたのか、驚いた顔をして姿を現す。

《拙者を仲間に…！？》

「いやーこないだは憑依しそこなつたけど氣に入つたからさお前なら…」

《断る》

笑いながら葉は勧誘するが、阿弥陀丸に拒否される。

《こないだは拙者とお主の意思がたまたま一致しただけの事》

その言葉を聞いてはつとした表情をする葉。

《それなくしてお主に協力する筋合はない 拙者ここを離れるつもりは毛頭ないのでな》

阿弥陀丸はそう言い、ギロリと音をたて葉を睨みつける。その行動にまん太は声を出し顔を青くする。

「えーついいじゃないかそんなケチくさいこと言わなくつたて」「なんだ?葉はこのサムライが欲しいのか?…だつたら暴力で屈服させればいい」

いつの間にか戻つて来たコータ。葉は阿弥陀丸の答えに口を尖らせ、コータは手の指をボキボキ鳴らしながら阿弥陀丸を見つめる…こいつならやりそうだ!!

「はつ!…よつ!…葉くん、コータくんちよつといつちおいでッ!!」「お?」「なんだ?」

まん太は葉とコータの腕を掴むと、墓場から引き連れて公園まで引つ張つていぐ。…そんな小さい体で良くなそな力があるな。

「つたく 何考えてるんだ君達は!! よりによつてあの侍を仲間にしようなんて!!」

公園まで連れて行き、二人をベンチに座らせたまん太は、一人の耳元でそう叫ぶ。…鼓膜破けるぞ?

「何がだよー」「ちょッ耳元で叫ぶな…」「何つて!!」

「あの侍は“鬼人”つてよばれてるんだよ!錯乱して自分のお殿様にさからい 何百人の侍を斬り殺したって伝説がある恐ろしい奴なんだ!!」

まん太は阿弥陀丸の事を興奮して説明するが、それを聞いた二人にはあまり変化はない。

「んー鬼人かあ」「鬼人ねえ」

「そうだよ！だからやめとけってばさ」

二人は口にしながら悩むと、まん太も仲間にすることを止めさせようと説得する。

「そりやホントに強そうだな やつぱ仲間にした方が

「そんなに怖そうな奴だつたか？ 鬼人じやなくて奇人の間違いな

んじやね

」

「だーつ！！こいつらやつぱり聞いちゃいねーっ

が、やはり二人は話を聞いてはおらず、まん太は頭を搔き鳩巣くのすなりながら叫ぶ。

「聞いてるつて でもアイツ本当は悪い奴じやないと思うんよ。だつてアイツと一つになつた時なんかあつたかかったから

「あつたかかった！？」

「まあとにかく、もう少し調べてからまたアイツの所に行けばいいんじやね？」

と言つ事で明日、郷土資料館に行くことになった。

……で、翌日になり、やつてきました『ふんばりが丘郷土資料館』。三人は資料館に入り、今現在阿弥陀丸の刀が展示してある所に立っています。

「おおー！！ よくこんな物が残つてたな

！！

「何でだろ…刃物つて見ると、何故かテンション上がるよな

！」

刀の前で大声を上げて興奮する葉に小太郎。まん太はそんな二人を後ろから見て呆れている。

「『春雨』…… 600年前に阿弥陀丸が使っていた刀か！」

田の前にあるのは昔からあるためか、刃が鋒と鐔が入った日本刀とこれまたシミなどで汚れた鞘がガラスに入って展示されていた。

「ねーもー帰るつよー それで何がわかるつてのさー」

「いやーよくこんなもの知つてたなお前ー これなら充分な手がかりになるぞー！」

まん太の言葉に葉は嬉しそうに言葉を返す。……いや、これだけじゃあんまりわからない気がするが…

「そりゃー社会科見学でこいはよく来るからね でも手がかりなんてそこに書いてあることしか…」

「だから そんなのこいの刃の上でこいつ見てる こいの男に直接聞けばいんだよ」

葉がそう言いながら刀の上の空間を指すと… いきなり着物を着た幽霊が座りながら姿を現した！

「うわあ！ー？」 「なにい！ー？」

突然現れたことに驚き叫び声を上げるまん太と小太郎。 … 「コイツ、最近ビックリするの多いな。

「だだだ誰だこの人ー！？」

『オ オレ刀鍛冶の喪助ー つかオレを見てビビらねえとはむしろ そつちが誰だ』

靈… 喪助も予想外の反応にビックリしながらまん太達に話しかける。

「だから… いきなり出て来るなつて、… 言つてんだろ がつつ

！！！（激怒）

バコンッ！！

『グハツツツ！？』

突然現れた靈にビックリし、怒りながら顔面を殴り飛ばす小太郎。殴られたことにより喪助は床に叩き付けられる。

「ちよつヒー?」ぐらなんでも酷過ぎだよ… といつか前から思つて

「靈なんてサンドバックと一緒にでしょ?」

「靈達可哀れすぎるよー? もう少し優しくしてあげなよー。」

小太郎の冷酷すぎる言葉に全力で突っこ込むまん太。… しばらくして喪助が殴られた場所を押さえながら立ち上がる。

「600年つて...!?

「じゃあお前の刀のこと知ってるんだな」

『知るところが俺はこの刀の三を殺しかまつ異か』

「ええっ！！！あの鬼人を！！？」

『バカヤロウ！ 奴を鬼人なんて呼ぶんじゃねえ……』 何故なら奴と

不思議なこの刀をねがひあつたが

「前置きはいいからサッサと蝶れよ。」

『おめーなんなんだよ サツキつからー!? 黙つて聞いてるつーー』
喪助はガラスの上に座り直し、ぽつぽつと喋り出す。

…長くなるので省略。

喪助が涙ながらに話しあると、傍にいたまん太は涙を流し…葉と小太郎はどうでも良さそうな顔をしている。

『奴はオレが殺したんだ…だからせめて約束通り春雨を奴に渡すまで…俺は死んでも死にきれねえんだよ…』

「なんだ そんなことか」

「どうでもいいからわざと成仏しろよ 田障りだから」

『なんだとはなんだア…』

葉と小太郎の言葉に泣きながらソッコム喪助。…つか、小太郎言葉遣い酷すぎだる。

「じゃー私に行けばいんだよ」

『? オイちょっと待て 何を言つてるんだお前は』

葉の言葉に疑問を漂わせる喪助。そりや突然言われりや誰だつて戸惑つ。

「あの人…本当にいい人だつたんだね…」

『…』

「だつて…あの場所で600年もずっと… 喪助さんのこと待ち続
けているんだもの」

『う…うそだろオイ…』

泣きながら言つまん太の言葉に反応する喪助…すると、見る見る内に目に涙をため鼻が赤くなる。

『あ…あのバカ野郎… 本当に待つてやがるとは…』

「バカはお前も一緒にだろー? さあ早く阿弥陀丸んとこに行こうぜ」
「男が泣いてんじゃねえよ 気持ち悪い… 存在自体鬱陶しいな、口
イツ」

『ああもうーなんなんだよお前らは…』

泣きながら感動していた喪助だが、葉と小太郎の自由すぎる発言に
より泣きながらツッコム…。

『だいたいどのシリ下げて行くんだよ春雨はボロのまんまだし 幽
靈のオレには春雨に触る事さえ…』

まだウジウジ言つ喪助に対し、それを見ていた小太郎は額の血管を
浮き上がらせてイラつとする。

「お前にオイラの身体を貸してやる なぜならオイラは シ
ヤーマンだからなー!」

葉はそう言い右手をかざすと喪助がヒトダマとなり、そのまま葉の
身体の中に憑依させた。

その後…憑依した喪助は『春雨』を持つて町の鍛冶屋に行き、ナマ
クラになつた刀を打ち直した。

打つた後、葉から離れると刀を渡すように託し、そのままあの世に
成仏したのだつた。

で、今は墓地に戻り目の前にいる阿弥陀丸に春雨を渡していく所だ
…。

「待たせたな」だとさ

「喪助さん、やっぱり会わせる顔がないからつて先にあの世へ行
つちやつたよ… でもよかつたね この街に鍛冶屋があつて
「たくつ…メンドクサイことさせやがつて…つー」

『…そつか…なるほど お主のしわざなら合点がいく こんな刀を

打てるのは奴の外にいない… つたくあのバカ』

葉達の言葉に納得したのか、阿弥陀丸は座つたまま友人の悪口を言う…だが、その顔はとてもうれしそうだ。

『まさか まだ成仏せずにいてこの刀をうつてよこすとは 60
0年も待たせやがつて…！』

「まあ お互いバカとしか言ひようがないしな」

阿弥陀丸の言葉に言葉を返す小太郎。それを見ていた葉とまん太も
お互いを見合させ苦笑した。

… 小太郎が言ひと阿弥陀丸は立ち上がり、顔を笑いながら葉達を見
る。

『今すぐにでも追つかけてつてブン殴つてやりたいところだが どうやら拙者があの世へ行けるのは もう少し 先の事になるらしいな』

その言葉を聞いた葉達は喜びの声を上げ、小太郎は取り合えず阿弥
陀丸をブン殴つたのだった……。

こうして鬼人と呼ばれた侍 阿弥陀丸は葉君の仲間になつた。

たつた一夜にして郷土資料館の刀がピッカピカになつた事件は「春
雨の奇跡」として地方新聞の片隅に小さく掲載されたという。

第四話 鬼人…ゲットだぜッ！（ポ○モン風）（後書き）

小太郎「オイまん太。何も言わずこれ付けてみる」

まん太「…え、なにこれ？何で僕がこんなの付け「いいから…」…
わかつたよ…」

まん太は頭に猫耳を付けた

まん太「…これでいいの？」

：まん太が猫耳をつけると、小太郎と葉が互いの顔を見て頷き、言
葉を放つ。

小・葉「「萌えです！…！」

第五話 热帯夜の決闘

森羅学園中庭

この東京の蒸し暑さに小太郎達三人は逃れるため、外に出て涼もつとし、今現在学校の中庭の木陰に集まつた。

が、…それでも暑さは和らぐことはなく…、三人は全身から汗を流し、まん太は両手に教科書を持つて団扇代わりに扇ぎ、小太郎は木の影に入つて地面に寝転がりジッとし、葉は何故だか身体を動かしながら汗を噴出させていた。

「あつい…あつい…あつい…あつい…あつい…」
まん太…殺すぞ…（暑）

あまりの暑さで『暑いホール』をするまん太に、うつ伏せになりながら言葉を呟く小太郎…だが、小太郎もこの暑さで参つているのか…いつものように霸気がまつたくない。

「…あーこんなにあついのに、…なんで葉君はあんなに元気なんだ」「何でこの真暑い時に身体動かしてやがんだ…鬱陶しい…」

「…」われちやつたのか

まん太と小太郎は傍で身体を動かしている葉を見ながらそう呟く。

「ちがうぞまん太にコーダ！ オイラはあつさと戦つたいるのだ
二人の言葉に汗だくで笑いながら答える葉。

「あつさから逃げるから苦しくなる…だからこうしてあつさに立ち向かえば…楽しく生きられるのだ…！」

…そう笑いながら身体を動かす葉の目は血走つており、身体を動か

す理由も最後らへん全く関係ない」とを言つ葉。…」のまま後3分も動かしてたら脱水症状になだらひ…

「だめだこりや。葉君 あつさで本格的にこわれちゃったよ~」「…ありや、もう叩いても絶対直らんな……」

そんな葉を可哀そうなものを見る目で見ながら、一人は汗を流し喋り合つ…。

「テメエあつくるしいんだよ…」

「…」「…」「…」

そんな暑さでグロッキーな状態の三人に、近くの場所からそんな怒声が耳に入る。

声のする方に顔を向けると…そこには筋肉質な背の高い少年と、その少年のすぐ近くにはレンズの割れた眼鏡を掛けた太った少年が鼻血を出し悲鳴を上げていた。

「ほ…ぼぐが何をしたって言つの…」

「つむせえデブ!! もう一発殴られてえのか!!」

地面に転がり泣きながら理由を聞くデブ、…しかし筋肉は答えずそのまま拳を握りデブを齧す…。

…どうやら、デブは理由も分からずに筋肉に殴られたらしい。…いや、見た目が暑苦しいから殴られたのか?

「なんだ? まん太」

「ああ また彼荒れちゃつてるよ」

「知つてんのか?」

筋肉を見ながらまん太に聞く葉。

「知つてるも何も…葉君とコータ君 グッシー建二つてしつて

る？」

「知らん」「他人とかマジでいりでもいい」

「だよね」

…二人の答えに呆れながら説明していくまん太。

「グッキー建二っていえばアフロヘアーと独特的のファイティングポーズが売りの日本のボクシング界の神様って言われてた偉大なチャンピオンでね。…彼はそのグッキーに才能を見込まれた有望なボクサーだったんだよ」

「だつた？」

「グッキー建二の事故死でジムが潰れちゃったんだ。…もともととんでもない不良だつた彼をボクシングに向かわせたのがグッキーだつたのにその事故だろ！？」

そう言い、三人はデブの尻に蹴りを入れて筋肉を見る…

「おかげであーやつてまた不良に後戻り。…結局不良は何したつて不良だつたつてことだね」

「…ふん、尊敬する奴が死んだつてだけで目標失うなんざあ、女々しい野郎だな」

小太郎は筋肉をつまらなそうに見ながら呟く。

「森羅学園3年 飛内達史。^{とびないたつし}…とにかくあーゆう危険な奴には関係ないのが一番だよ」

…自分の傍に果てし無く危険な奴と関わっているにもかかわらず、まん太は呆れながらそう言い放つ。

「ん ボクシングチャンピオンの靈かあ…自分の持ち靈にしたら役に立ちそうだな」

そう言い、顎に手を当てながら考へる葉。

「まーねー」

「ボクシングのチャンピオンなら殴り甲斐がありそうだなあ……（一
ヤリッ）」

葉の言葉にまん太は返事をし……小太郎は口を歪ませながら不気味
に微笑んでいた。

「というわけであんたに聞きたいことがあるんだ！」

そう言いながら葉は達史に近づくと、ポンッと身体を叩いて聞く葉…
それをまん太はブリッヂしながら大声で葉をツッコム……いや、よく
その体制でツッコム出来るな（笑）

「つてあのバカ……葉君チャンピオンのことしか聞いてなかつたのか！？殺されちゃうよ……」

あたふたしながら葉を見るまん太。…小太郎はその横で鼻をほじつ
ている……。

「ああ？…なんだオメエ？」

「あんたの死んだ師匠に興味があるんだ！オイラにバシッと教えて
くれないか！？」

葉は腕を広げ笑い……その顔に達史は左手でぶん殴る…葉はそのまま
地面に尻もちをつく。

うん、まあ…どう考へても無神経な事を言つた葉が悪い。

「師匠だと？…一度とあのクソヤローの名を出すんじゃねえ！！
ムナクソ悪いぜ」

「葉ぐ
ん！？…だから人の話を聞いていればよかつた
のに……」

「…全く、面倒なことしてるんじゃないよお」

そつ言いながら倒れた葉の所に駆け寄るまん太と小太郎。そのまま葉を保健室に連れて行こうとする。

「おい、ちょっと待て！…テメエ、一年の江琦つていうガキだな…」

「……あん？」

葉を連れて行こうとする所を、達史が小太郎を見て呼び止める。…小太郎も立ち止まり振り向く。

「たしかここら辺じやあ『森羅の撲殺王』とかいう通り名で知られてるらしいじゃねえか」

小太郎を睨みながら挑発する達史。…それに対し小太郎も鼻で笑いながら言つ。

「オレもお前の事知つてるぞ…確かに、動物園のサルコーナーの檻の中で見かけたよなあ…（微笑）」

「…つだとコラ…！」

小太郎の言葉にブチ切れながら殴りかかる…が、

「ウゼエッ…！」

「ドムンッ…！」

「ゴボオオ…？」

小太郎の放った右パンチが達史の鳩尾にめり込み、そのまま腹を押さえ地面に沈む達史。…。

…地面に沈んだ達史を見ると、そのまま小太郎は唾を吐き付ける。

「ペツ！…バカが、弱エークセに糸がつてんじやねーゾ（怒）」

「…何故だろ？…彼よりコータ君の方が全然危ない人に見えるよ」
まあ実際危ない人ですから。…まん太は呆れた視線で小太郎を見る
と、そのまま葉を保健室まで連れて行つた。

：保健室に葉を連れて行くと、まん太は呆ながら殴られた所に湿布を貼る。

「いたつ！」

「これでよしと…にしてもほんとバカだねきみは…」

「いて～！…だつてアイツそんなに悪い奴つて思わなかつたんだも
の」

だからつて自分の尊敬していた奴の事に聞くか？普通ー。

『拙者も同感で』ざるな

「！あつ阿弥陀丸！！」

「だから急に出て来んなつていつてんだろうがッ！…」

バシンツ！！

『ヌゴオオオオオオオオ！！？』

突然葉の後ろから現れた阿弥陀丸。それにまん太と小太郎が驚き、
小太郎は突然出て来た阿弥陀丸をぶん殴る。…てか、コイツ靈を苛
めているにもかかわらず突然だとビビるよな…

「たく…次やつたら本氣で沈めるぞ？（怒）

『誠に申し訳ないで』ざる！コータ殿！！』

「…で、阿弥陀丸も悪い奴じや無いつて言うのかい？」

阿弥陀丸が復活すると驚きながら聞くまん太。…ちなみに、前回阿弥陀丸は小太郎に殴られた後、阿弥陀丸は小太郎に対して低姿勢になつた…。

葉>小太郎>まん太>阿弥陀丸つと言つた所だ。…なんだか、阿弥陀丸が不憫に見えて来た…。

『…拙者にはわかるのでござる…鬪う男の眼差しが、…あの男の目にはまだ闘志がくすぶつているようにみえたでござる』

「だろ！なあ 調べてみないか あの飛内つて奴のこと…」

『おお！それはよいとござるな』

葉の自分勝手すぎる意見に賛同する阿弥陀丸。…それに対し呆れながら喋るまん太。

「ハツ そんなの無理だね。 だつてアイツ両親も友達もいないし誰の心も開かないん…」

「だから！」

「そのチャンピオンの靈を探すんだよ。 彼の師匠だつたんだから何か知つてるかも知んないだろ？」

「ええーっ！ あのグッキー健一の靈を…？」

「成仏してなければの話だけどな。 …だつてや」

葉は言葉を切り、手の指をからめて腕を伸ばす。

「逃げてばっかりじゃあ苦しいだろ？」

「な…」

…。 そう言いながら笑みを浮かべる葉に、まん太は絶句した表情をする

「よしつ 阿弥陀丸！ おまえは知り合いの靈に聞き込みしてくれ」

『ウムツ！』

「オイラとまん太、コータの三人はリングのある会場とか巡るぞ」

「ええ～つ

「あ、オレパス」

……葉の提案に普通の調子で断る小太郎。小太郎はめんじくをそうに葉を見る。

「なんだ？」「一タ…なんか用事でもあるんかあ？」

「いや、だつて普通にメンドツ……うん、そうだ。今日はどうも外せない用事があつてだなあ……」

「そつかー。じゃあしようがねえな」

「ああ、しようがないことなんだよ」

「いやいや「一タ君フツーに嘘ついてるからー…? 明らかにメンドクサイつて言おうとしたからー…!」
まん太のツツコミも華麗にスルーし、小太郎は一人にその場で挨拶するとそのまま家に帰つて行つた……。

夜、小太郎は自室で布団で睡眠を取るつとする。

……が、このヒートアイランドと化した東京。例え夜になつたとしてても、昼間に内に溜まつた熱は逃げることなく、まるで南米のジャングルの様に蒸し暑い夜を小太郎は体験していた。

もちろん、そんな状態の中布団で眠れる筈もなく。小太郎は暑さに悩まされながら態勢を変えて眠るつとする……。

「ううつあー————！ 眠れるわきやねーだろ糞がツ……」
流稀は布団から跳ね退くと、部屋から出て外に飛び出していった。

……勢いで外に出た小太郎、夜の街を充てもなくブリーブリーブラする。……すると、前方の丁字路から声が聞こえて来る。

「…………つ竜さーん。オレ等あの場所のビルも取られちまつて……これから俺達どおすりやいいんですかね？」

「……バツカヤローマッスルパンチ（あだ名）……ベストプレイスなんてまた探せばいい。……それより、この場にいる全員が無事で何よりもだぜ……！」

『竜さーーーん！！！』

……この糞暑い夜にこれまたクソ暑苦しく大声で泣きしているボロボロの不良たち。……ハツキリ言つて近所迷惑以外の何者でもない。

その光景を見ていた小太郎は今すぐに不良たちをボコボコにしようと考えたが……、前に自分に負けたザコより、少しでも強い相手の方がやりがいがあると思い、小太郎は不良たちが来た方向にダッシュし、不良共をやつた奴を探す。

しばらくして、小太郎は相手を探すために工事中の看板の立つたビルの前までやつて來た。その辺を散策していると、工事中の廃墟の中から話声がかすかに聞こえた。小太郎もその声を耳にするどビルの方を見る、すると柵を乗り越えて小太郎はビルの中に入つていった。

ビルに入った小太郎は話声のする所に近づいていくと、ドアの隙間から光が漏れている部屋にたどり着く。

： 小太郎が中に入ると、そこにはリングに上がった葉と達史がボクシングをしており、そのリングの脇にはまん太と阿弥陀丸が観戦している姿が目に移つた。

唚然となる小太郎…取り合えずまん太に話しかけた。

「おい、お前ら何してんだ？ こんな所で…」

「コータ君！？ そっちこそこんな所で何やつてんの…？」

『おお！ コータ殿、こんな所で会えるとは奇遇でござるな…』

： まん太達も突然小太郎が現れることにビックリするが、お互いに話した後、小太郎も一緒に観戦することになった。

： 小太郎達が見ている中、達史はグッキーが憑依した葉に連続のジャブの嵐を喰らわせようとする…が、葉には全く効いてない。

「《オイオイオイ、ジャブのつもりか？ 素人さんを相手にしてるんじゃねえんだぞ… コラ…！》」

葉は達史の攻撃を抜けると、相手にボディフックを放つ…見事相手の腹に命中する。

「すごい…！ ジャブの嵐をかいぐぐつてのボディフック…！ グッキーはあれで世界を取つたんだ…！」

『うむ… よくわからんが とにかくシャーマンは自分に降ろした靈の動きをそのままトレースで来るので』

「ほ… さすがに世界最強といわれる攻撃をして来るな… だが、

あれ如きじや俺に勝てんな……」

「かはつ（なんだこのガキ……あの動きはまさに……）」

葉の攻撃で全員が思い思いのことを考える。……達史は態勢を戻し葉を睨む。

「へつ ガキの猿マネだと思つて油断してたよつだ。……今度はこつちも本氣で行かせてもらつぜ……」

「《つ……このクソガキがあ…… あればどひ言つたのにテメエまだ自分を甘やかすクセが直つてねえのか達史……》」「

『ソウル・フック！…』

「《いつまでも逃げてんじやねエ！…》」

葉が怒鳴りながらそつぱつと、右腕を振り被り……強烈な一撃が相手の顔面を打ち抜く！…！

……強烈な喰らつた達史は意識を失う寸前、まるでスローモーションのように思考を回転させた……。

「（ソウル・フック！…！ 総合の敵をキャンパスに沈めた師匠の必殺パンチ）……！」

達史が目の前の葉を見ると、……その背後にグッキーの姿が浮かび上がる。

（師匠！？ 奴の背後に師匠が見える！？）

驚愕しながら見ると、葉の背後にいたグッキーが達史に笑顔を送る。……それを見た達史も釣られて笑い、

「……いつもそうだ。オレを叱つとばした後のその笑顔……やめてくれよ……」

「なんかまた 前向きに拳闘したくなつちまひじやないスか

……」

… そう言いながらマットに沈んだ達史、彼が意識を失う直後、リングの外から声が聞こえた…。

「はー終ーーー。… さて、次はこのオーレの番だ…。… 楽しみつか
ツーーーー（極悪顔）」

あの倒れ際、朦朧とした意識の中で達史さんは確かに師匠の靈と会うことが出来たのだ。

やがて彼はリングに復帰し“グッキー”と呼ばれるようになる。
…といふで、

「ねえ葉くん で 結局あのグッキーの靈せどりしたの？」

「どうか行つた（グッキーが）」

「え、それってあの世に行つたってことじやないの？」

「コータと試合してボロ負けした時、悔しくなつたから世界中を飛び回つて修行するつてよ」

「アッシュ、けつこうな技を使つがやつぱりパワーが足りないな（眠）

「…「コータ君ボクシングやつたら？絶対世界とか狙えるよ…？」

「かつたりーからバス」

今回の持ち靈 *gōeit* は見事に失敗した葉くん、それとやつぱりコータ君は強いとわかつた今日この頃

まんた

第五話 热帯夜の決闘（後書き）

評価お願いします。

小太郎「オイまん太。また何も言わずこれ付けてみる」

まん太「…またあ？もうやだよこんなのが「早く！」…ほんとに嫌なのに…」

まん太は頭にクマ耳を付けた

まん太「…ていうか、こんなの一体どこで買つてくるの？」

…まん太がクマ耳をつけると、小太郎と葉が言葉を放つ。

小・葉「…なんか、思つてたのと違う…」「

まんた「人に無理やりやらせといて、それ！？」

第六話 坊ちりやも（笑）登場（前書き）

遅くなってしまったすみません。

第六話 坊ちゅま（笑）登場

小太郎がグッキーをブチのめしてから数日が経ち…また小太郎達の教室でまん太が大声で騒ぎだす。

「本当なんだつてば…!! いつものあの墓の丘に、中国の武将の靈と一緒の少年がいたんだよ…!!」

まん太が机に寝ていた葉と小太郎に興奮した様子でしゃべりかける。最近、小太郎が寝ている所にまん太が喋りかけても怒らなくなつた。…これも、成長したからだろうか?

「ありや間違いない! シャーマンだよ…!! 君の他にもシャーマンがいるんだ!!」

「へえ…そりやす!」いや、「…お前、なんでそんなに興奮してんの?」

「驚かないの!??」

まん太の言葉に普通に寝ぼけながら答える葉と小太郎。…むしろ、まん太が驚かない一人を見て驚いた。

「なんだよ、うるせえなあ…。誰もシャーマンはオイラだけなんていってないだろ シャーマンは今でも世界中にたくさんいるつて…「お前の万辞苑にも載つてんだ…。少なくとも世界に数人は居るから載つてんだろうが…」

「だから…!! そいつが君の阿弥陀丸を頂くつて…!! それは大変

なことではないのか！？

二人の寝ぼけた問いに我慢できなくなり、まん太は一人の耳元で大声を上げる。

「……阿弥陀丸を？」

まん太の言葉で葉は眼を覚ます。

「～～～ウッセーーだろうがッ！－（怒）」

パカンツ…！

「イツタ――――――ツ！－？？」

…まん太の言葉で小太郎は起きたが、自分の上靴を脱いでまん太の頭を叩く小太郎だった。

放課後：Mad nailt店内（ナルトを挟んだナルトバーガーたる混沌としたモノを売る飲食店）

「蓮…蓮…蓮…、…やっぱわからんわ。 そんなシャーマン聞いたことない」

葉達三人は店内の椅子に座り、昨日まん太が見た蓮というシャーマンについて話し合つ。…が、その人物について葉は全く知らないらしい…。

「本当…？でも何かあるんじゃないの？ どつかで恨みを買ったとか」

「ねえ虹凧からゴルにからやつちやた事忘れてるんじやねーのか
?」

「うーん…そんな覚えはないけど…考えられたとしたら やっぱア
レだな」

「アレ?」
「…て、なんだ?」

「赤テラ」ジャーマンの語彙

「ホラ シャーマンの格はより強い靈を持つことで決まるって前に
言つたろ？ そいつ…どつかでオイラと阿弥陀丸のこと 見てたん
じゃねえのか」

様するは今もどこかで見てしNの可能性もあるって」とか……ハサキ
り言つてそっちの方が怖いな

『なるせじ それ強くてかい』ここ指者を我がものにしうつとした
でござるか

「阿弥陀丸！」

いつものごとく突然現れた阿弥陀丸。……そんな阿弥陀丸を小太郎は無言で蹴り飛ばす。

《又才才才才才才才才才！！？》

蹴られた事で店内に転がる阿弥陀丸。勢いが止まり蹴つた本人を見ると……そこには般若が立っていた。

「てめえ……相當、学習能力がないと見えるなあ……やつぱ、肉体おはなし言語するしか理解できないか……？」（激怒）

そへ言しながら立ち上かり、指をハキハキと鳴らしながら阿弥陀丈に近づいていく小太郎。

… 周りにいたお客様も小太郎を見て顔を青ざめている。

そんな鬼の顔となつた小太郎を見た阿弥陀丸は全力で床に土下座をし許しを得ようとする。…3分後、取り合えず許しをもらい、小太

郎は元の席に座り直す。

「…たくつ一次やつたら本氣での世に叩き落とすぞ（パンパン）」
『本当に面目ないで』ざる…』

「へつへ…大変だな 阿弥陀丸」

「もうなんか 日常の光景みたくなってきたね」

葉とまん太は何度も見たため慣れたのか、小太郎の様子を見て苦笑いを浮かべる。

『ふう…、先程の話に戻るで』ざるが、拙者その御仁の持ち靈が中國の武将というのが気になるで』ざる。 日本のサムライとしては』でも、それがホントに強そuddたし 蓮つて奴もなんか危ない目してたよ…大丈夫なの?』

「うえつへつへつ…大丈夫だよ」

葉の独特な笑いに、三人は葉の方に顔を向ける。

「だつて 瞳の見える人間に悪い奴はない。 だからそんなきにすんなつて」

「コータ君みたいのもいるのに?」

「オイコラ、どういう意味だまん太?」

ガシツ！

「イデデデデデデデテ！！！」

まん太の疑問の言葉に頭を掴みアイアンクローワーを仕掛ける小太郎。
…まあ、当然そんな疑問も出るだろ。

「うえへつへつ…「コータも何だかんだ言つてけつこう優しいからな」葉の言葉を聞いてキヨトンとする小太郎。…アイアンクローワーを止め、少し顔が赤みを帯びる…。

「きっとそいつにもなんか理由があるんだろ、オイラも会つてみて

えな。初めてのシャーマン友達になれるかもしれんし」

『おお！拙者もぜひ一度その中国の武将に会つたみたいで』
『たのしみで』
『やるな』

「だな」

「もう勝手にしてくれ」

「…フンッ」

葉のダラツとした雰囲気が周りを包み、まん太は呆れ、小太郎は自分
のナルトバーガーをがつつく。

「何すんじゃこのガキ！？」

そんな雰囲気の中…店の外から男性の怒鳴り声が聞こえ、まん太が
ビクッと身体を揺らす。

「大変だつ！」

「なんだなんだ』『ム？』「？」「チツ…「つっせーなあ」

その声に反応する4人組…声のした方に顔を向ける。

「外で子供が…！…チンピラにからまれてる…！」

…外を見て見ると、路上には無駄に光っている制服を着た男の子と、
その男の子をアロハシャツを着た4人の男が取り囲んでいた。

「ああ つ あいつつ！」

葉達の傍で見ていたまん太が、男の子を見て驚いた声を上げる。

「…どした？まん太」

「蓮！ アイツが蓮だよ…！」

「おお あいつが」

『武将の靈は見えないで』
『やるが… あれは一体何事で』
『やるか』

「てか、なんだアイツの服…よくあんなキラキラした服恥ずかしげもなく着てられんなあ（笑）」

まん太の言葉で三人は男の子…蓮を見る。そう見ている間にも蓮達は話を進める。

「フン…ギャアギャア騒ぐな害虫ども。オレはただその車が邪魔だつただけだ」

「ハア！？だからって蹴るこたねーだろ！イカれてんのか！？」

「つか害虫とか！？」

チンピラの一人が目に涙をためて車を指差す。…みると、車の右ライトが割れ、ライトの周りもボロボロにへこんでいる…。こりゃ確かに誰でも怒る。

「そいつが撒きちらす排気ガスは空気を汚し 星をおおいかくしてしまう。…貴様らにはそれで十分、地球上に巢食う害虫ではないか…このチャバネゴキブリが…！」

そう言いながら蓮は睨み、チンピラ達は顔に青筋立ててブチ切れる…明らかに喧嘩言つてるもんな。

「てめえ…！」「なめんじゃねえぞ…！」

「フン」

「らああっ…！」

…チンピラ達が蓮に殴りかかるとする瞬間、目にも止まらぬスピードで動き、不良たちに拳や蹴りを叩き込む…。

「おおつ 拳法…！」

「へH…」

「すごいよ あの動き…！」

その様子を見ていた小太郎達三人は驚いた声を上げる…小太郎達が驚いてみている間に、不良たちは地面にうつ伏せに倒れていた。

「…あつという間にやつつけちゃつた…！」

「なかなかやるじゃないの…あのトンガリ？」

「なんだよ アイツ本当にシャーマンなのか？なんもしなくて強えじゃん」

「いやつ あの時 確かに靈が…僕の見間違いだつたのかな…？」蓮の強さを見た葉は本当にシャーマンなのかまん太に問いただすが、まん太も混乱しているようだ。

「…ヤ、ヤロウ… ぶつ殺してやる…！－！」

葉たちが口論している間に、地に伏されたチンピラの一人が車の中に乗り込みエンジンを掛けぬ…

…そして、その車は猛スピードで蓮に跳ね飛ばそうとエンジンを鳴らし、突進してくる…！

「ああつ…！ あのチンピラ…車で跳ね飛ばす氣だ…！」

「チツ やはり害虫は駆除するべきだな」

…蓮はそう言い、自分の来ていた上着を脱ぎ捨てる。そして…その下には黄金に輝く位牌が…！－！

「ホルダーに位牌！？」

「いでよ…！ 馬孫…！」

『オオオ オオーン！』

蓮がそう叫ぶと、後ろから中国武将の靈が出現する。

『…』「出たつ…！」「ホー」

トランクから折りたたみの馬孫刀を取り出し、蓮は自分の位牌を手に取ると大声で叫ぶ。

「『憑依合体・馬孫』…… 中華斬舞……」

蓮が自分の靈を憑依させ田の前の車に刀を振つ……すると、車は見事に真つ一いつになつた。

「なつ」

あまりの出来……と、その光景を見ていた誰もが啞然とし、しばらくして斬られた車が爆発した……

「車がまつぶたつう

！？」

『なんとー』

「……すげー、なんだよアレ」

「ホラ見ただろ葉君……あれだよ」

……まん太の言葉に葉は反応せず、ただ眼を見開き車を切つた蓮を見つめる葉と、その光景を見て身体を震えさせる小太郎。

……蓮は車を運転していたチソピラの傍まで行くと、刀をそのチソピラに着き付ける。

「う……うう なんだつたんだ今のは……？」

「ほう……やはりゴキブリの生命力とはたくましいものだな……

だが、死ね

「！？えつ！ ええ つ……！」

ガシツ

「いいかげんにしどけ

「！」

蓮がチソピラに攻撃しようとした瞬間、葉は蓮の刀の柄を掴み動き

を止める。

葉の表情はいつもと違い、少し真剣な顔で蓮を睨んでいた。

「…クク 現れたな、ヘッドホンの男…！」

「お前… 一体どういうつもりだ シャーマンが人の命を奪おうとするなんて…！」

「そうムキになるな…」こいつらの命などなんだといつのだ。 キサマもシャーマンならオレの気持ちを理解できるだろ？」「

「空気を汚し、星を見ず、我が物顔でくらこつくる寄生虫…それがこいつら腐った人間の正体だ。

こんな奴らがいくら死のうがかまわない… オレの名前は道連タオレン。この世界を浄化するシャーマンの王になるべき人間だ」

…空氣を読まずに言ひてしまつて、突然出てきて何を言ひしているんだお前は？

突然そんなこと言われたつて… キヨトンとする以外何も出来ねーぞ！？

「シャ… シャーマンの王…！？」

『世界の浄化とは…？』

「オイまん太、そのバーガー食わねーの？… だつたら俺にくれ」

…こんなシリアルスな展開にもかかわらず、小太郎はまん太のチーズナルトバーガー（115円税込）を奪い取り食っている。…もう少し空氣とか考えてほしい。

「さあ… 話は終わりだヘッドホンの男！ オレのために貴様の持靈を献上するがいい！」

「いやです」

「何ッ！？」

いや当たり前だろ。何驚いてんだコイツ……そつちに驚きだわ。…『
イツ絶対親に甘やかされて育てられてるわ』…。

「そもそもなんなんだお前は、さつきからわけのわからんこと言つ
て！　だいたい人に向かつていきなり『よこせ』とはなんだ！」

「フッ…じゃあ下さいとでも言えばいいのか？」

「違う！！阿弥陀丸はオイラの友達だ！　くれてとか下さいとかモ
ノ扱いするなつひとつてんだよ」

「友達…？」

「おおとも！　お前も阿弥陀丸の力を借りたいんなら友達になれば
いいだろ？　オイラ達の」

「…ブッ

フハーッハッハッハッ！『靈が友達！？　キサマは靈が友達だと思つ
ているのか！　こいつは驚いたな』

葉の言葉にアメリカンに笑い出す蓮…その態度に葉も少しムツとな
る。

「？何がおかしい？」

「おかしいも何もあるか　我らシャーマンにとつては靈などしょせ
んその能力を引き出すための道具にすぎん。その道具に下らん友達
感情をいだくなどまつたく馬鹿げているとは思わんのか？」

「…道具…だと？」

「なんだその顔は、　オレはただ眞実を述べただけではないか」
葉は蓮の道具と言う言葉を聞き、空気が険悪なものとなつていく。
…店内で見ていたまん太は慌て、小太郎は外の二人を睨そうな目で
見つめている。

「…フッ　しかしシャーマンの王も知らぬシャーマンがいるとは…

たいそうな靈を持つてゐるクセにとんだ素人のようだな」蓮はそう言つと、後ろから持ち靈である中国武将…馬孫を出現させる。

「キサマにあの「サムライ」は使いこなせん…強い靈はこのオレが持つてこそふさわしいのだ

キサマがどうしてもよこさぬといつのなら、力ずくでもオレのモノにしてやるまで…

…行け馬孫…まずは持ち靈であるあのシャーマンを破壊するのだ…

…

「はかい！？って殺すつてことかい！？」

「元来、靈とは拠り所のない不安定な存在… 飼い主を失つた迷い靈などプロのシャーマンにかかれれば本人の意思を問わず簡単に手なずけられる。…そしてみごとな道具へと生まれ変わるので！」

「…お前のその後ろの奴もそうやって戦闘マシーンにしたてあげたのか？…おまえがどんなたいそーな奴かはよつわからんが…」

葉はそう言いながら、足元に転がっていた鉄パイプを拾い上げ、手に力を込める。

「靈を道具扱いするのだけはなんか許せん！阿弥陀丸！」

《ヒヒヒー》

「話は聞いてたろ？」「こつをこじらしめいやうぜ…なんか こいつ間違つてる！」

《同感！》

「フフッ 出てきたな「サムライ」…もうすぐモノに出来るとはワクワクするなあ…！」

『『行くぞ！憑依合体…』』

お互ひが掛け声を上げると、自分の身体に持靈を体内に憑依をせる

!!

「うわっ！ ちょっとと待つてよー君達本氣で戦つつもりなの
！？」

：「サムライ」対！「武人」……シャーマンは……時代も国境も
超えたバトルまで実現しちやうのか！？」「

『ぬううー』『オオオー！ー！』

ガカアンッ！ー！

シャーマン同士のバトル……開始ッ！ー！

第六話 坊ちゅま（笑）登場（後書き）

小太郎「… なあ、まん太。お前のポテト、食わねーんならオレに頂戴（むしゃむしゃ）」

そう言いながらまんたのポテト（Mサイズ）を奪い取り食う小太郎

まん太「少しばかり緊張感持つてよッ！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9528y/>

幽霊？拳で叩き伏せろッ！！！

2011年12月17日22時50分発行